

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770136

研究課題名(和文) インド北東部におけるラルテー語の記述言語学的な研究

研究課題名(英文) Descriptive Studies of the Ralte language in Northeast India

研究代表者

大塚 行誠(Otsuka, Kosei)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：90612937

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：ラルテー語はチベット・ビルマ語派チン語支に属するインドの少数言語であり、その話者数は九百人程度にすぎない。近年、ミゾラム州が従来の外国人入域制限を緩和したことで、ラルテー語をはじめとした少数言語を調査する環境は整いつつある。今がラルテー語を調査する絶好の機会と考え、ラルテー語の言語学的記述と記録を行った。

ラルテー語に関する先行文献や言語資料は無きに等しく、ミゾラムにおける現地調査では、基礎語彙を調べることから始まった。これまでの調査の成果としてラルテー語の基礎的な言語資料を公開し、基本的な文法事項に関する論文を執筆してきた。現在は、文法スケッチおよびテキスト集を一般公開する準備を進めている。

研究成果の概要(英文)：Belonging to the Kuki-Chin subgroup of Tibeto-Burman languages, Ralte is spoken mainly in the state of Mizoram in northeast India. Although the language's estimated number of current speakers is 900, Ralte's speaking population continues to decline sharply.

Until recently, foreigners were restricted from visiting Mizoram, which made it nearly impossible for foreign researchers to access Ralte and its speakers. Even though the state government has relaxed those restrictions and allowed foreigners to enter Mizoram, knowledge of Ralte remained scarce until 2010s, when plans for research on minor languages spoken in Mizoram began to take shape.

As part of that research, I have collected evidence of Ralte's basic lexicon and published preliminary papers on its phonology and grammatical issues based on data collected during my fieldwork. At present, I am preparing to publish both a sketch of Ralte's grammar and a text in the language for the purposes of documentation.

研究分野：言語学

キーワード：記述言語学 インド チベット・ビルマ語派 チン語支

1. 研究開始当初の背景

(1) ラルテー語 (Ralte, ISO 639-3: ral) は、チベット・ビルマ語派チン語支に属するインド北東部の言語である。ラルテー語を母語とする話者の多くはミゾラム州をはじめ、マニプール州やトリプラ州などの周辺一帯に住んでいる。



(2) ミゾラム州には「ラルテー」という氏族名を持つ者が多く住んでいる。しかしながら、その大半は、ラルテーという氏族に特有の言語と文化を知らず、ミゾラム州で最大多数を占めるミゾ族の社会に同化して暮らしている。

(3) ラルテー語を母語として話す話者の数は、ミゾ語の影響を受け、減り続けている。ラルテー語話者の住む地域にはミゾ語話者が多く、ラルテー語話者の大半がミゾ語とのバイリンガルとなっている。現在、ラルテー語を流暢に話すことのできる話者の多くは、60代以上の高齢者である。以上の点で、ラルテー語は今まさに消滅の危機に瀕していると言えるだろう。

(4) ラルテー語は、政治、経済、文化の面で優勢なミゾ語に圧迫され、その言語構造や話者の文化に関する詳細な記録の無いままこの世界から消えようとしている。いちどラルテー語が話されなくなれば、必然的にラルテー語話者の持っていた習慣や考え方など、重要な文化的財産を同時に失うことになる。

(5) 言語学的な観点から見れば、ラルテー語をはじめとするチン語支諸言語に見られる言語的な特徴は、いわゆるビルマ系の言語とチベット系の言語の間を埋める特徴を示し、チベット・ビルマ語派の比較言語研究および語彙形式の分布からも欠かすことのできない材料を提供すると言われている。しかしながら、チン語支の個別言語の記述言語学的な研究は未だ初期的な段階にあり、記述文法書も非常に少ないのが現状である。ラルテー語など、チン語支に属する各言語を詳細に

研究することは、チベット・ビルマ語派の系統分類に関する研究のみならず、言語類型論など一般言語学の発展にも寄与できると考えている。

(6) ミゾラム州では少数言語の記述言語学的研究が進んでいない上、消滅の危機に瀕しているラルテー語についての先行文献や言語学的な資料もほとんど無い。上記の(4)と(5)の背景から、ラルテー語の音韻と語彙、文法を言語学的な観点から体系的に記述しながら記録を進め、その研究成果を広く一般に向けて公開していくことで、インド北東部における少数言語の研究モデル構築を目指そうと考えるに至った。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、消滅の危機に瀕しているチベット・ビルマ語派の言語、ラルテー語の音韻体系および基礎語彙を調査し、記述言語学的な観点からその文法を記述することである。

(2) ラルテー語の文法を記述することにより、チン語支の詳細な言語情報が分かるようになる。チベット・ビルマ語派全体の研究の発展に貢献できるほか、ラルテー語ならではの独特な語彙体系や文法構造を明らかにすることで言語類型論などの一般言語学にも重要なデータが提供できると考えられる。

(3) 本研究に関わる言語調査自体、言語の多様性を維持するという大きな意義を持つ研究活動である。その為、消滅の危機に瀕したラルテー語を詳しく記録することの重要性を国内外に示すことは、インド北東部の言語研究者と少数言語の話者に強いインパクトを与えることができると考えられる。

3. 研究の方法

(1) インド共和国北東部にあるミゾラム州アイゾール県で年に1回ずつ、1か月間ほどのフィールドワークを行うことでラルテー語のデータを集めた。ラルテー語話者の多く住む地域は、2012年から外国人でも自由にアクセスできるようになり、ミゾラム州の情勢が安定化したことで、州内での行動の制限も大幅に緩和されている。ラルテー語話者のコミュニティやミゾラム大学の教員、現地の言語研究者とも親密なネットワークを築き、調査協力者本人とも連絡を取りあっていたため、フィールドワークを通じた調査はおおむね順調に進んだと言える。

(2) ミゾラム州の調査地では、ラルテー語話者への聞き取り調査および参与観察を通して、基礎語彙を調査した。ある程度基礎語彙が集まった時点で、基本的な文法事項に関

する聞き取り調査も行った。さらに、ラルテー語話者に語り継がれる物語や伝統歌謡、自然会話を録音することができたため、現在も研究機関へのアーカイブ登録を目指して書き起こし作業を進めている。

(3) 日本国内ではフィールドワークで得られた調査結果をもとに、ラルテー語の音韻および文法に関する論文を執筆し、研究機関を通して言語資料を提供した。現在もラルテー語の文法現象に関する論文を執筆している。

4. 研究成果

(1) インド共和国ミゾラム州アイゾール市のボンコーン地区で行った、ラルテー語の初期調査の結果を基に、ラルテー語の音韻について報告した。その報告では、ミゾ語とティディム・チン語をはじめとした他のチン語支の言語との対照的な観点からラルテー語の音節構造および音素を提示した。

(2) 主に服部 (1957) を基に、基礎語彙調査を行い、その一部を公開した。公開した基礎語彙リストは、スワデシュ・リスト (Swadesh 1952) に挙げられている語彙項目に従って作成したものであり、207 語に絞っている。ミゾ語とティディム・チン語の基礎語彙データも同時に提示することで、周辺のチン語支の諸言語とも対照的な観点から見られる構成となっている。

(3) フィールドワークでは、様々な民話を収録することができたが、その多くは通常ミゾ語で語られる。ミゾラム州では、「チェムタートロータ」という民話が広く親しまれている。この民話は、普段ミゾ語で語られることが多いが、インフォーマントに依頼し、ラルテー語で語ってもらうことにした。ラルテー語版の「チェムタートロータ」を収録し、書き起こした。グロスと日本語訳を付けたものを資料として公開している。

(4) 周辺言語のミゾ語およびティディム・チン語と対照しながら、ラルテー語の人称標示、および人称標示に関連する文法現象について簡潔に記述したものを論文の形で公開している。

従来、ティディム・チン語（北部語群または周辺語群に属する言語）とミゾ語（中央語群に属する語群）のうち、ラルテー語はティディム・チン語の語群に属すとされてきた。しかしながら、人称標示を見ると、ミゾ語との共通性も見られることが分かる。

たとえば、一人称複数形における包括形と除外形の区別や二人称の主語や所有者を示す人称助詞の (na) という音形、複数を示す助詞 =ù□ の存在等は、ティディム・チン語と類似した点を多く持つ。しかしながら、目的語の人称を示す人称助詞の存在等、ミゾ語

との共通点も見られた。まだ公開はされていないが、以下(6)に見られる動詞語幹の振る舞いをみると、よりミゾ語に近い特徴を持っていることが分かる。

チン語支諸言語のサブグループ化に向けた対照研究を更に進めていくには、語彙だけでなく、文法現象についても記述し、考察していく必要があることを主張した。

(5) フィールドワークで得られたデータをもとにラルテー語における再帰・相互標識 -du:nI の形態統語的な特徴について調査し、報告した。ラルテー語における再帰・相互標識の -du:nI は、拘束形態素として動詞の後に付加するほか、-du:nI のほかに -dutI という派生形を持つ点で動詞とよく似た形態的特徴を持っている。この点では、他のチン語支諸言語とも違って興味深い。初期報告ということで、-du:nI を含む具体例を挙げながら、チン語支諸言語との対照的な観点からの考察も行った。

現在、再帰・相互標識について既に記述は終わっており、現在公開の準備をしている。

(6) ラルテー語の動詞類に属する語の多くは1語につき2つの語幹を持っている。このような2つの語幹形式は、言語によって程度の差こそあれ、チン語支の様々な言語で共通して見られる現象の一つである。この2つの動詞語幹を「語幹形式」と「語幹形式」とそれぞれ呼び、統語面および機能面から見ると、語幹形式は無標の基本形式であり、語幹形式のほうは有標の派生形式であると言える。

現在、語幹の交替について記述し終え、現在公開の準備をしている。

(7) ラルテー語の調査を進めながら、アショ・チン語など、他のチン語支の言語に関する文法現象についても調べ、記述した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

OTSUKA, Kosei, Person marking system in Asho Chin, North East Indian Linguistics, Vol. 7, 2015, pp.125-137,
<https://openresearch-repository.anu.edu.au/bitstream/1885/95392/5/North%20East%20Indian%20Linguistics%207%202015.pdf>

大塚 行誠, ラルテー語における音韻体系ミゾ語およびティディム・チン語との対照的考察、東京大学言語学論集 電子版 (eTULIP) Vol.36, 2015, pp.e49-e59,
http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/58886/1/ggr_e36004.pdf

大塚 行誠、ラルテー語の基礎語彙とテキスト、アジア・アフリカの言語と言語学、査読有、Vol.10、2016、pp.325-344、
<http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/85074/2/aal1010012.pdf>

大塚 行誠、ラルテー語の人称標示、東京大学言語学論集 電子版 (eTULIP) Vol.37、pp.e19-e28、
http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/61261/1/ggr_e37002.pdf

6 . 研究組織

(1)研究代表者

大塚 行誠 (OTSUKA Kosei)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員
研究者番号：90612937